秋田県文化財調査報告書　第149集

上雨堤遺跡発掘調査報告書

――県道本荘・西仙北・角館線改良工事に係る埋蔵文化財発掘調査――

１９８６・９

秋田県教育委員会

上雨堤遺跡発掘調査報告書

――県道本荘・西仙北・角館線改良工事に係る埋蔵文化財発掘調査――

1986・9

秋田県教育委員会

序

秋田県には先人の残した多くの文化財が残されています。これら過去の文化遺産は現代に生きる私たちの責任で保護し、未来に継承していくべきであります。

このほど、秋田県土木部により、県道本荘・西仙北・角館線の改良工事が計画されました。この工事は西仙北町地内において、周知の遺跡である上雨堤遺跡の一部にかかることが判明し、工事に先立って発掘調査を実施いたしました。

その結果、平安時代の掘立柱建物跡や土壙などが検出され、大きな成果を上げることができました。

本書はこの調査結果をまとめたものでありますが、県民各位の文化財に対する御理解と歴史研究の上でいささかでも役立てば幸いです。

最後に、秋田県土木部仙北土木事務所、西仙北町教育委員会、地域住民の皆様をはじめ、調査にあたり御指導、御協力下さった多くの方々に対し、厚く御礼申し上げます。

昭和61年9月1日

秋田県教育委員会

教育長　斎藤　長

例　　言

1．本書は秋田県教育委員会が昭和60年11月８日から12月７日に渡って実施した、秋田県仙北郡西仙北町上雨堤遺跡の発掘調査報告書である。

2．本書は児玉　準が執筆した。

3．遺物の実測、計測、トレースは整理作業員があたった。

4．遺構断面図、土層図中の数値は標高である。

5．土色の表記は農林省農林水産技術会議事務局監修　財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖』によった。

6．須恵器実測図の断面は黒く塗りつぶし、土師器と区別した。

7．内面黒色処理が施された土師器の実測図には、内面にスクリーントーンを貼った。

8．遺構に使用した略記号は下記のとおりである。

ＳＡ……柱列　ＳＢ……掘立柱建物跡　ＳＫ……土壙

上雨堤遺跡発掘調査報告書

目　　次

第１章　は　じ　め　に …… 1

第１節　発掘調査に至るまで …… 1

第２節　調査の組織と構成 …… 1

第２章　遺跡の立地と環境 …… 3

第１節　立地と環境 …… 3

第２節　周辺の遺跡 …… 3

第３章　遺跡の概観 …… 5

第１節　遺跡の概観 …… 5

第２節　調査区の設定 …… 7

第３節　調査の経過 …… 7

第４章　遺構と遺物 …… 9

第１節　検出遺構と遺物 …… 9

第２節　遺構外出土の遺物 …… 11

第５章　ま　と　め …… 18

挿　図　目　次

第１図　上雨堤遺跡周辺地形・遺跡図 …… 4
第２図　土　　層 …… 5
第３図　グリッド配置図 …… 6
第４図　遺構配置図 …… 8
第５図　ＳＢ01掘立柱建物跡 …… 9
第６図　ＳＢ01掘立柱建物跡・ＳＡ01柱列 …… 10
第７図　土　　壙 …… 12
第８図　土壙出土遺物 …… 13
第９図　遺構外出土遺物(1) …… 14
第10図　遺構外出土遺物(2) …… 15
第11図　遺構外出土遺物(3) …… 16

表　目　次

第１表　土器観察表（１） …… 16
第２表　土器観察表（２） …… 17

図　版　目　次

第１図版　遺跡　ＳＢ01掘立柱建物跡（北西より） …… 19
第２図版　遺跡　１．ＳＫ02土壙確認面　２．ＳＫ03土壙出土刀子 …… 20
第３図版　遺跡　１．遺跡遠景　２．調査前の状況 …… 21
第４図版　遺跡　１．ＳＢ01掘立柱建物跡（南東より）
　　２．ＳＢ02掘立柱建物跡（北西より） …… 22
第５図版　遺跡　１．ＳＢ01掘立柱建物跡柱穴
　　２．ＳＫ01土壙　３．ＳＫ02土壙 …… 23
第６図版　遺跡　１．ＳＫ03土壙　２．ＳＫ04土壙
　　３．ＳＫ05土壙 …… 24
第７図版　遺物 …… 25

第１章　は　じ　め　に

第１節　発掘調査に至るまで

上雨堤遺跡発掘調査は、県土木部による県道本荘・西仙北・角館線の改良工事に係る緊急発掘調査である。この県道は雄和町から西仙北町を通り角館町へと至る路線で、西仙北町半道寺付近では西野・上野両部落の南側を迂回する延長1,862㎡のバイパス工事が計画された。

しかし、西野部落の南側には周知の遺跡である上雨堤遺跡があるため、この遺跡にかかると判断される1,620㎡を対象として発掘調査を実施することにしたものである。

第２節　調査の組織と構成

遺跡所在地　秋田県仙北郡西仙北町土川字上雨堤（かみあまづつみ）116番地の２他

調 査 期 間　昭和60年11月８日～12月７日

調査対象面積　1,620㎡

調 査 面 積　1,640㎡

調査主体者　秋田県教育委員会

調査担当者　熊谷太郎（秋田県埋蔵文化財センター　社会教育主事）
児玉　準（　　同　　文化財主事）

調査事務担当者　加藤　進（　　同　　主査）
佐藤　健（　　同　　主事）

調査作業員　岡田衛三郎　小笠原栄一　小松　作市　小松幸太郎　嵯峨　重昌　嵯峨　忠吉
嵯峨　富治　嵯峨　美富　佐藤謙治郎　佐藤　正　佐藤　信雄　佐藤龍之助
佐土　茂　田口　民治　田口門之助　阿部スズヱ　岡田テツノ　金子サダ子
久保　則子　小松　敬子　嵯峨　イヨ　嵯峨　和子　嵯峨かほる　嵯峨　チヨ
嵯峨　貞子　嵯峨　秀子　佐藤　カツ　佐藤　カヨ　佐藤　友子　佐藤　勇子
菅原サヱ子　菅原テツヱ　田口タケヨ　宮野ハルヨ

事務補助員　嵯峨みき子

整理作業員　荒川美智子　大西　英子　奥山　文子　倉田　美佳　小松　郁子　坂本　美利
菅原　リヱ　高田由里香　高橋千加子　高柳　良子　原　真由美　森川　怜子

森元てる子

調 査 協 力　秋田県土木部仙北土木事務所　西仙北町教育委員会

第２章　遺跡の立地と環境

第１節　立地と環境

上雨堤遺跡は仙北郡西仙北町土川地内に所在し、国鉄奥羽本線刈和野駅の南東 2.2㎞、東経140°24′、北緯39°32′ の位置にある。遺跡をとりまく地形は標高100ｍ前後から300ｍに達する丘陵地と、その間を切って流下し雄物川に合体する河川、及びそれらによって形成された低平な砂礫段丘と沖積面を含む平地から成り立っている。

遺跡地は雄物川狭窄部低（台）地に属し、標高33ｍ前後の低平な砂礫段丘上にある。遺跡北方には標高300ｍを越える畑山丘陵、東方には200ｍ代の虚空蔵岳丘陵、また南東には70～80ｍの金葛岡丘陵があり、これら丘陵の間に土買川、心像川が流れ、半道寺において合流し、さらに西流して刈和野に至って雄物川と合体している。雄物川は強首より上流部では湾曲率が大きく、且つ幅広い自由蛇行に伴い河跡湖、旧河道、乱流跡、自然堤防、砂堆微高地など特色ある地形を残している。(註１)

遺跡西側及び南側は土買川の沖積面で、東側は段丘上を南北に走る沢によって区切られており、遺跡地は南に向かって張り出す小さな舌状台地をなしている。土買川までは 400ｍほどである。遺跡の現状は畑地、杉林で、調査区南側は開田されている。

第２節　周辺の遺跡

遺跡周辺には雄物川とその支流によって形成された河岸段丘が発達し、遺跡も多く発見されている。

上雨堤遺跡の 1.3㎞北方にある刈布沢遺跡は昭和53年に発掘調査が行われ、縄文前期の大木式土器が多数出土しており、これに隣接する金精野遺跡（５）は中期の遺跡である。晩期の遺跡としては殿屋敷（６）、一ト鶴台（２）、四階沢（３）のほか、神岡町八石（10）、萩の台遺跡（11）があり、殊に殿屋敷遺跡では泥炭層中から朱塗櫛が出土している。この他に縄文時代の遺跡として大楽Ⅰ（７）、上ノ台（９）、神岡町油公園（12）がある。

中世城館は西仙北町にも多く13箇所が登録され、上雨堤遺跡付近には寄騎館、茶臼館、朝夷奈館、黒沢館、岩井堂館の５館が存在する。大楽Ⅱ（８）には経塚がある。(註２)

この他、西仙北町教育委員会が調査したものに、強首字上の台にある柏台遺跡があり、昭和

56年に縄文時代後・晩期の遺物が出土している。(註３)

註１　　秋田県農政部農地整備課『土地分類基本調査　刈和野』 1979（昭和54年）

註２ａ．秋田県教育委員会『秋田県遺跡地図』 1976（昭和51年）

　　ｂ．秋田県教育委員会『秋田県の中世城館』 1981（昭和56年）

註３　　西仙北町中央公民館副館長、信太健一氏の御教示による。

第１図　上雨堤遺跡周辺地形・遺跡図

第３章　遺跡の概観

第１節　遺跡の概観

本遺跡は標高33ｍほどの低い台地上にある。この台地は遺跡の北西側と南側で緩やかに傾斜して沖積面へ続いている。東側には小さな沢があって、これをせき止めて溜池が設けられている。遺跡の北東には県道本荘・西仙北・角館線が通り、道路の両側に住宅が並んでいる。バイパスは現道の南側を迂回するもので、杉林、畑地、荒地を通る直線部分が調査地点である。調査地点の南西側の一部が既に開田されており、その際に遺物が出土している。付近の畑地上にも土師器、須恵器の散布が見られることから、主として今回調査区域の南西側に遺跡の広がりが予想される。

調査区北東壁で観察した土層は以下のとおりである。

第Ｉ層：黒褐色土（10YR$^{3}/_{1}$）。耕作土で植物根が多量に入っている。遺物を含む。

第II層：暗褐色土（10YR$^{3}/_{3}$）。やや硬くしまった遺物包含層である。下部から平安時代の遺構が掘り込まれている。

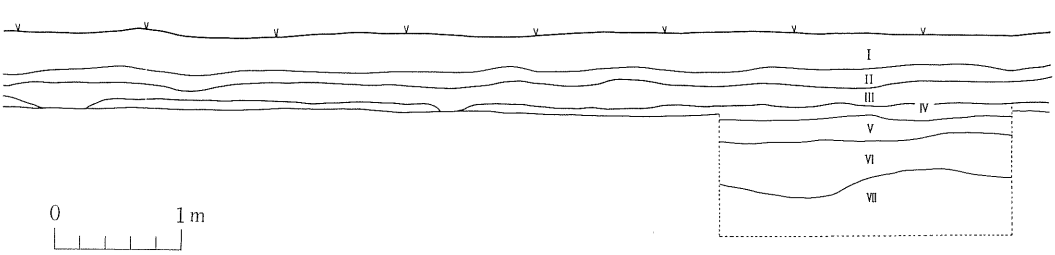
第III層：黒褐色土（10YR$^{2}/_{2}$）。下部が粘質でしまりがある。

第IV層：灰黄褐色土（10YR$^{4}/_{2}$）。硬く、しまりがある。III・Ｖ層の漸移層である。

第Ｖ層：淡黄褐色土（５Ｙ$^{8}/_{4}$）。粘質で硬く、しまりがある。

第VI層：灰白色土（５Ｙ$^{7}/_{1}$）。粘質で極めて硬くしまっている。

第VII層：明黄褐色土（10YR$^{6}/_{8}$）。極めて硬くしまっている。部分的にボロボロと剥離しやすい。この層の下は砂礫層となる。



第２図　土　　層

第３図　グリッド配置図

第２節　調査区の設定

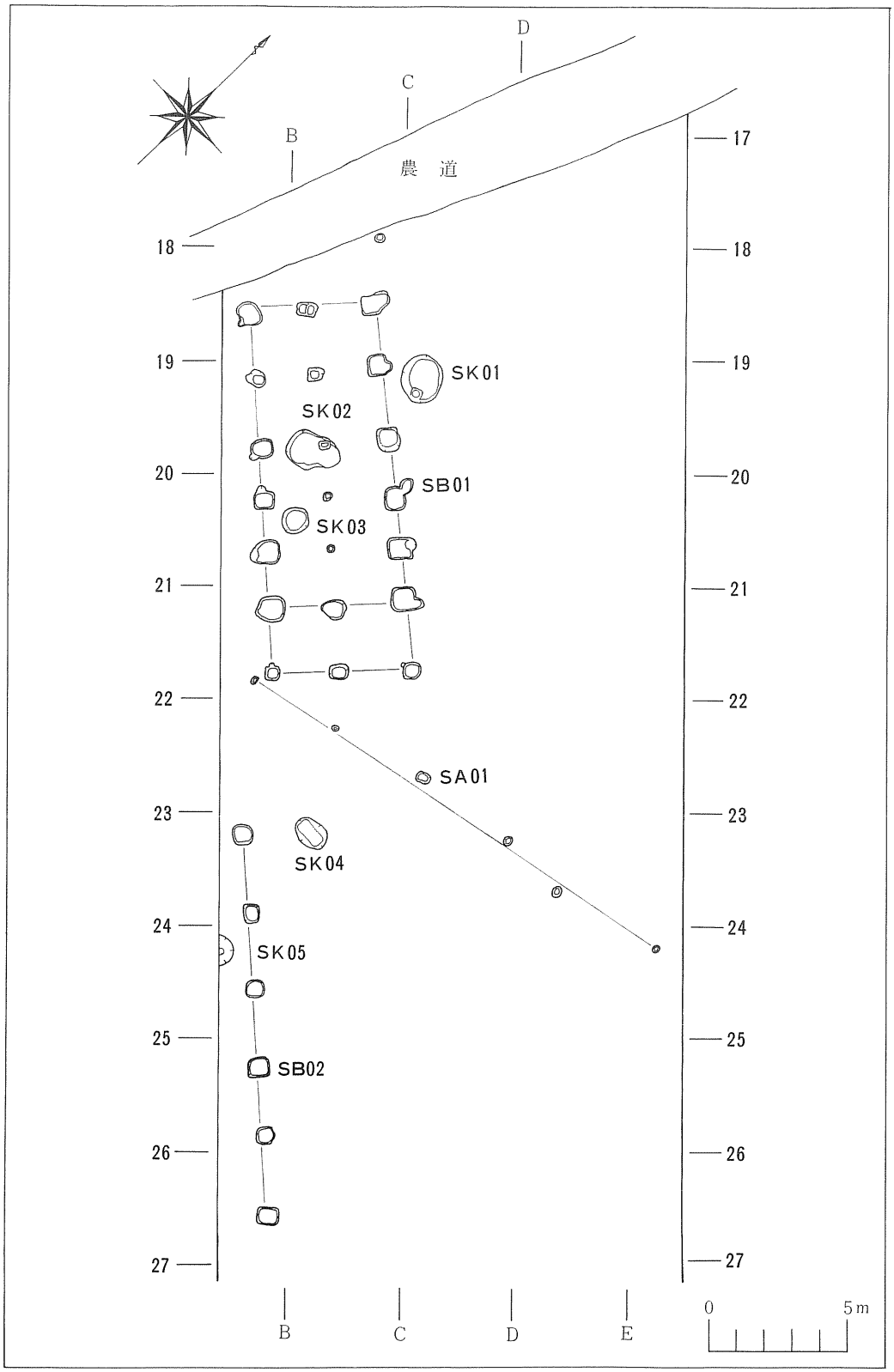
上雨堤遺跡はバイパス工事に伴う発掘調査であるため、調査範囲は長さ 150m、幅15～18.5mと狭長である。調査区域の中央部と西側に幅５mほどの農道が通り、東端は小さな沢となっているため沢に向って緩やかに傾斜している。

調査区域内には杉・アカシヤなどの立木が多く、この抜根、除土作業はユンボを使用して行った。この作業と併行して調査範囲内の東西両端の試掘調査を行った結果、この部分には遺構は存在しないものと判断された。精査の後、主として中央部の農道付近から遺構、遺物が検出されたので、グリッド杭の打設はこの付近のみとした。

グリッドは４m方眼とし、細長い調査区に沿った東西方向には東ほど順に増加する算用数字、これに直交する南北ラインにはアルファベットを付した。グリッドの呼称は東南隅の座標で呼ぶこととし、座標名は算用数字とアルファベットの組み合わせで呼んだ。

第３節　調査の経過

11月８日調査開始。プレハブを建設し、調査予定区域内の立木伐採、草刈りを行う。12日、ユンボで東端から抜根、表土除去を開始。19日には東半部の除土を終え、精査しつつグリッド杭を打設する。翌日には抜根、除土作業が終了、掘立柱建物跡、土壙が検出され、完形の土師器杯などが出土した。26日ごろ全域にわたる地山面精査の結果、西半部には遺構が存在しないことが判明した。12月３日ごろから土壙や掘立柱建物跡の実測を開始し、７日に至って調査を終了した。


D
C
B
農　道
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
SK01
SK02
SB01
SK03
SA01
SK04
SK05
SB02
B
C
D
E
0
5m

第４図　遺構配置図

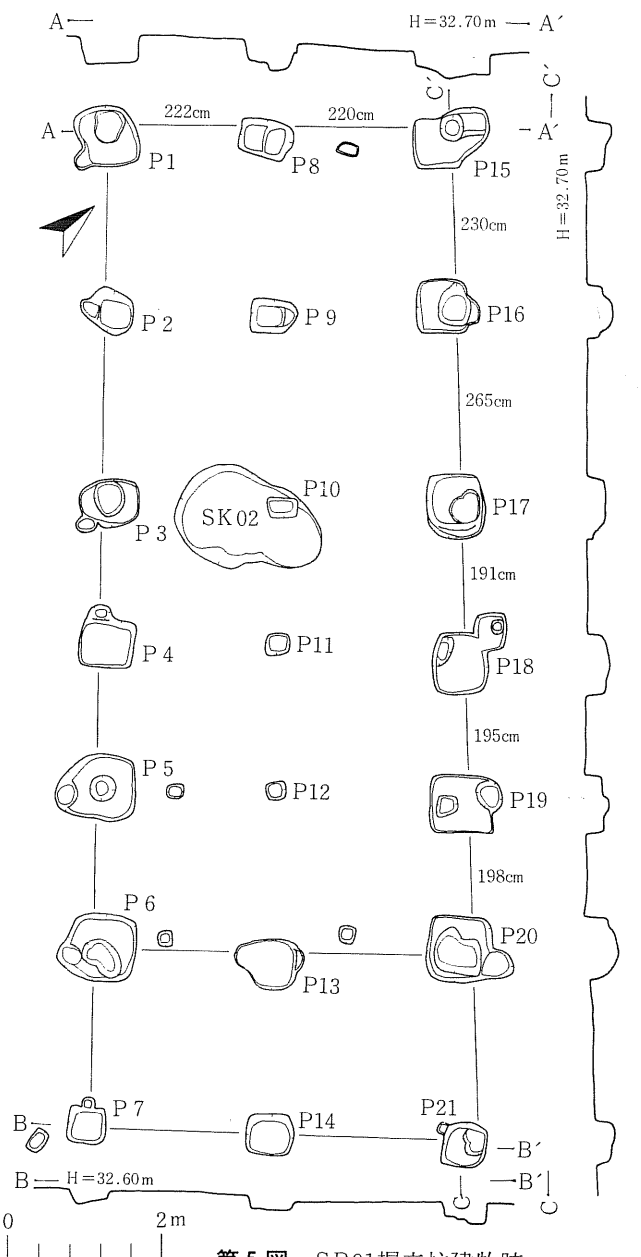
第４章　遺構と遺物

第１節　検出遺構と遺物

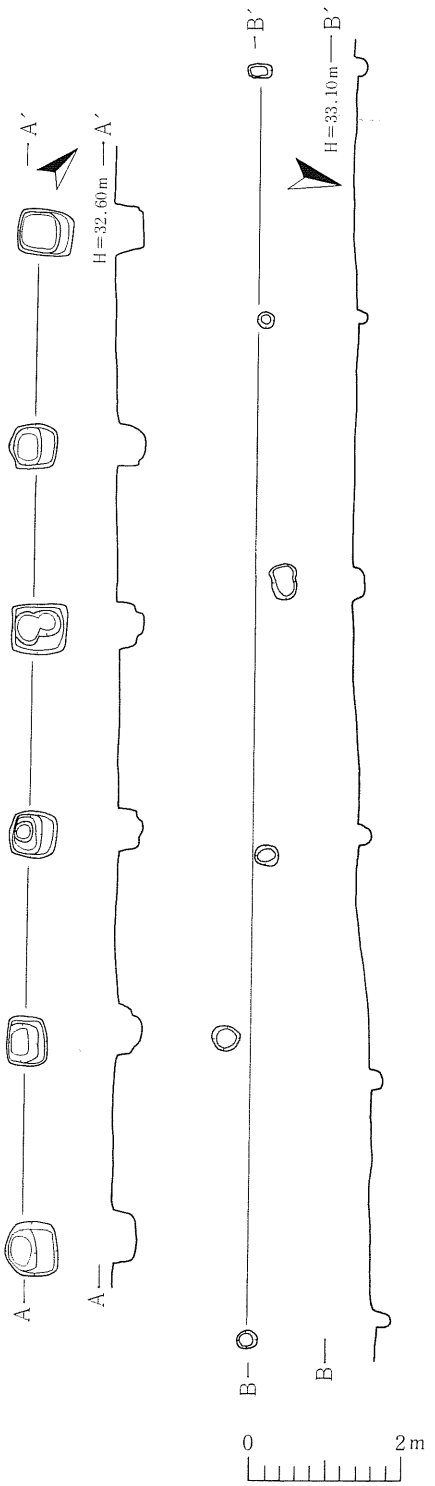
（１）　掘立柱建物跡

SB01 掘立柱建物跡（第５図、第１・４・５図版）

19Ａ～22Ａ、19Ｂ～22Ｂグリッドの第Ⅱ層下部から掘り込まれている。桁行６間（総長1,315cm――北側）、梁行２間（総長498cm――西側）の建物である。建物の軸方向は桁行でＮ－51°－Ｗである。東側のＰ７・14・21は掘形規模が他に比べて小さく、この位置に庇がつくものと考えられる。身舎の桁行柱間寸法は、北側では西から230cm、265cm、191cm、195cm、198cm、梁行は西側では北から220cm、222cm、庇の幅の平均寸法は230cmである。柱掘形は全体に略方形であるが、Ｐ９～12の規模が小さく、床束の可能性がある。径20cmほどの柱痕跡がＰ13、19、20などに見られ、南北両側の桁行では建物外方に、掘形を切る形で小規模な掘形と柱痕が見られる場合がある。Ｐ９はＳＫ02土壙と重複するが、両者の新旧関係は詳らかではない。



第５図　ＳＢ01掘立柱建物跡



第６図
ＳＢ01掘立柱建物跡・ＳＡ01柱列

ＳＢ02掘立柱建物跡（第６図、第４図版２）

24Ａ～27Ａグリッドの第Ⅱ層下部から掘り込まれている。建物跡の北側桁行５間（総長1,350㎝）のみが検出され、梁行は不明である。建物の軸方向はＮ－47°－Ｗで庇は付設されない。桁行柱間寸法は、西から262㎝、290㎝、266㎝、250㎝、284㎝。柱掘形はＳＢ01掘立柱建物跡同様にほぼ方形を呈し、一辺54～74㎝、深さ32～38㎝、掘形底面にわずかな凹みがあり、これに重なる形で径20～24㎝の柱痕跡が観察される。

（２）柱　　列

ＳＡ01柱列（第６図）

ＳＢ01掘立柱建物跡のＰ７付近から25Ｆグリッドにかけて並ぶ柱列である。第Ⅳ層面で検出したが、掘り込みは第Ⅱ層からと思われる。総長1,700㎝、柱間寸法は東から404㎝、250㎝、368㎝、352㎝、332㎝、方位はＮ－79°－Ｅ、掘形は円形で径16～20㎝、深さ24～48㎝、柱痕跡は見られなかった。

（３）土　　壙

ＳＫ01土壙（第７図、第５図版２）

20Ｃグリッドに検出した。167×145㎝の楕円形で中央部は深さ25㎝ほどであるが底面は東側がしだいに低くなる。壁は北側が垂直に近い立ち上がりであるが、南側は外方に緩やかに傾斜して立ち上がっている。全体に黒褐色土が堆積し、土師器坏（第８図１～５）、須恵器長頸瓶（６）が出土した。

ＳＫ02土壙（第７図、第２図版１、第５図版３）

20Ｂグリッドに検出した。194×126㎝の楕円形で深さは中央部で36㎝ある。底面はほぼ平坦で壁は急激に立ち上がる。覆土上面に焼土が混入する層があ

り、その下部は一部が硬化しており、この面で火を焚いたものと思われる。ＳＢ01掘立柱建物跡のＰ10が重複しているが、土壙上面では確認できず、土壙堆積土を掘り下げ中に底面で検出した。土師器坏（第８図７～10）、須恵器坏（11）、甕（12）が出土した。第８図９は体部外面に墨書がある。

ＳＫ03土壙（第７図、第６図版１）

21グリッドに検出した。径98cmの円形で、底面は丸みを帯び、最深部は確認面から25cmの深さがある。黒褐色土が堆積しており、土師器坏（第８図13）、須恵器坏（第８図14）、甕（第８図15）、鉄製刀子（第８図16）が出土した。刀子は全長30.8cm、刀身の長さ23.5cm、茎の長さ7.3cmで茎の端部を欠損している。厚さは刀身で0.6cm、茎で0.5cmである。

ＳＫ04土壙（第７図、第６図版２）

23Ｃグリッドで検出した。平面形は確認面では128×92cmの楕円形であるが、底部は105×45cmの長方形をなしている。ほぼ平坦な底面から壁が急な立ち上がりを呈しており、断面は舟底状である。堆積土は黒色土と黒褐色土が互層をなして中央部が凹む自然堆積の様相を呈している。遺物は出土しなかった。

ＳＫ05土壙（第７図、第６図版３）

25Ａグリッドに検出した。ほぼ南半部が調査範囲外に出ているが、平面形は径100×110cmほどの円形をなすものと考えられる。土層断面を見るとII層の中部から掘り込まれており、底面は丸みを有し、やや急角度で壁が立ち上がる。遺物は出土しなかった。

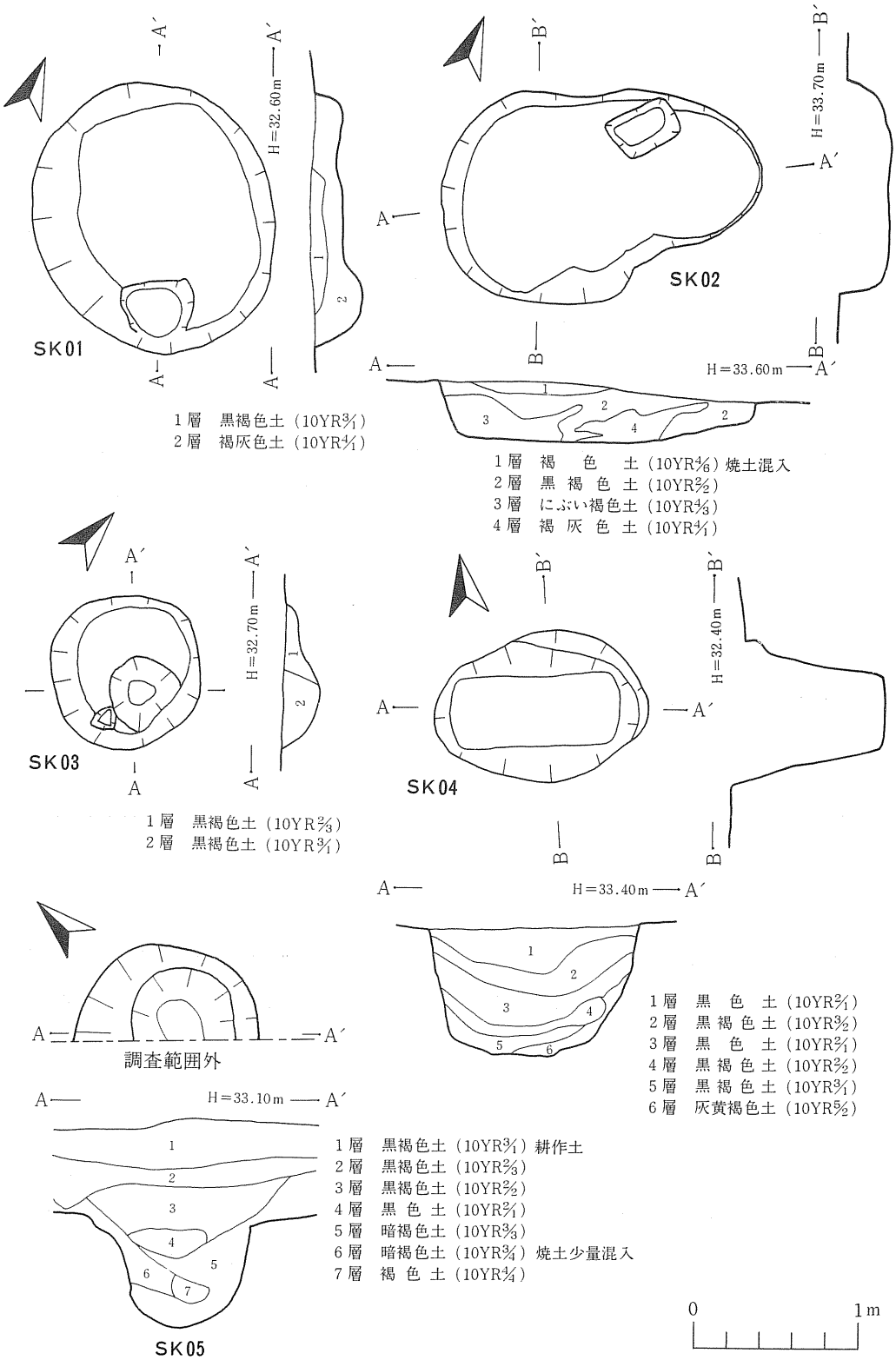
第２節　遺構外出土の遺物

（１）　縄文時代の遺物

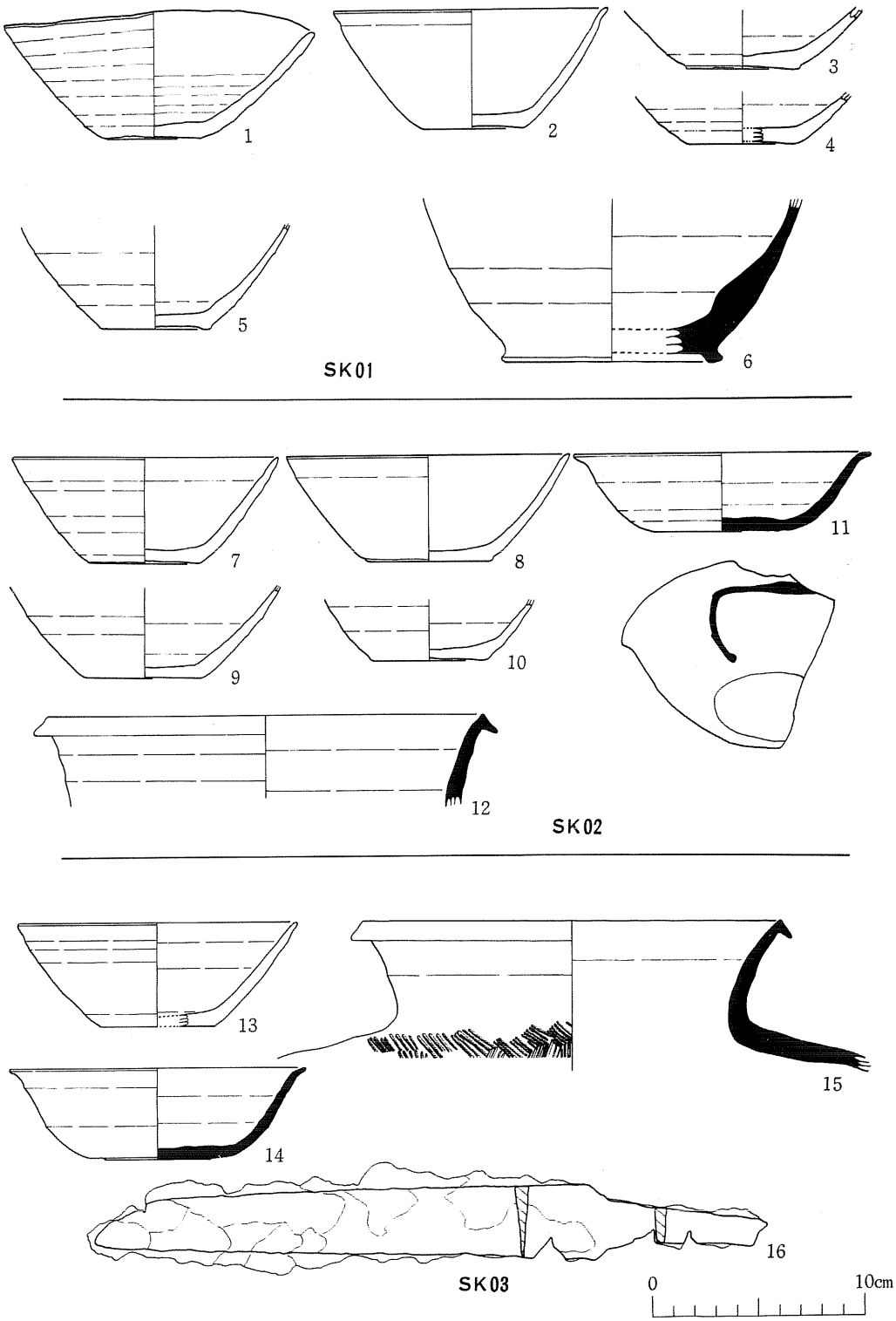
１点であるが19Ｃグリッドから出土している（第11図４）。底径3.8cm、残存高7.4cm、胴部最大径7.4cmの小型壺形土器で、胴部にＲＬ斜縄文が施されている。後期頃の土器と考えられる。

（２）　平安時代の遺物

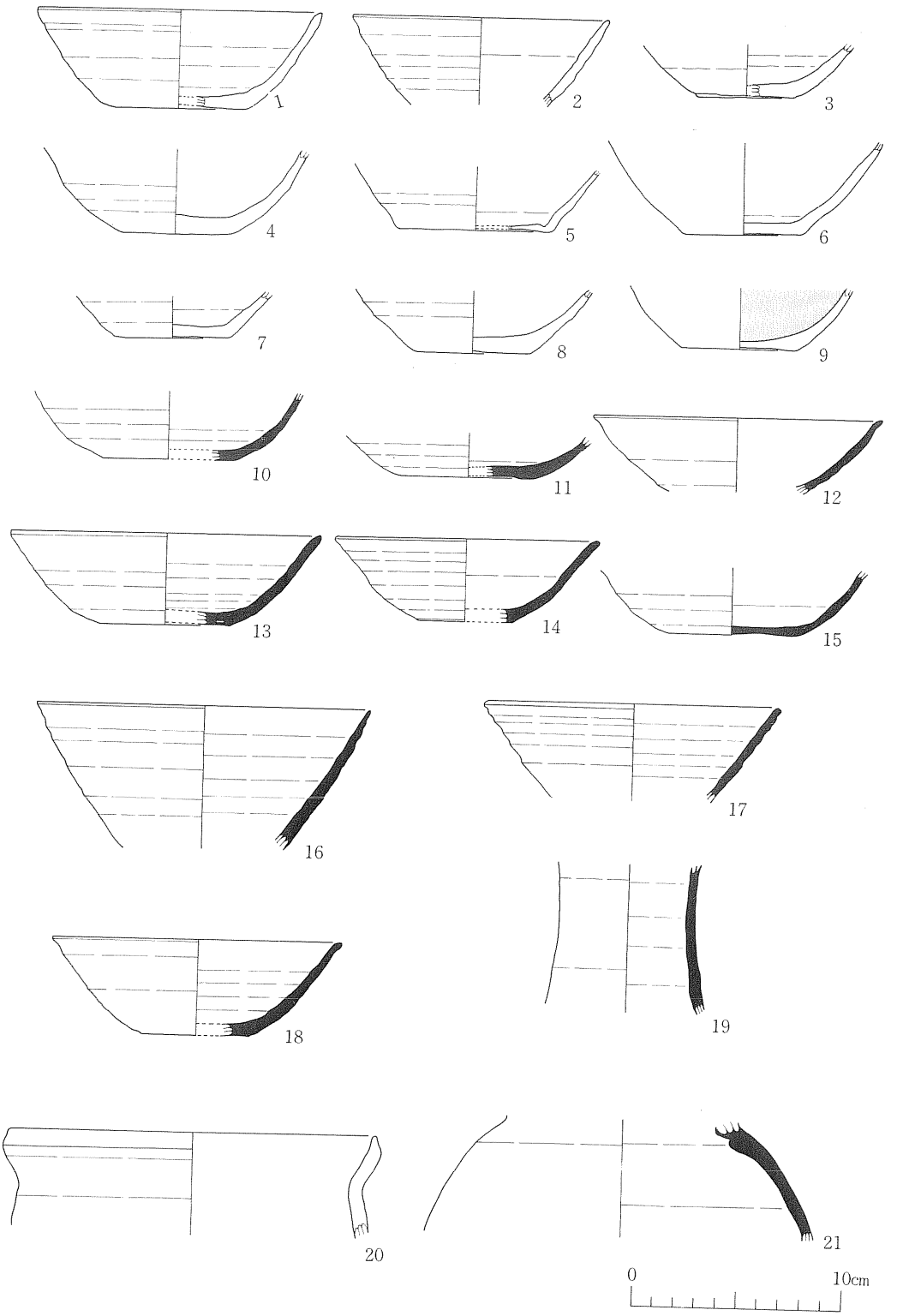
土師器坏（第９図１～９）、甕（20）、須恵器坏（10～18）、長頸瓶（19・21）、甕（第10図）の他、砥石（第11図１・２）、土錘（３）が出土した。砥石（１）は5.8×5.5cm、厚さ4.3cm、砥面は５面ある。（２）は6.9×2.8cm、厚さ1.7cm、両面に砥面を有する。土錘は縦3.1cm、中央部最大径1.7cm、径0.3cmほどの孔を有する管状土錘である。


SK01
H＝32.60m
1層　黒褐色土（10YR3/1）
2層　褐灰色土（10YR4/1）
SK02
H＝33.70m
H＝33.60m
1層　褐　色　土（10YR4/6）焼土混入
2層　黒 褐 色 土（10YR2/2）
3層　にぶい褐色土（10YR4/3）
4層　褐 灰 色 土（10YR4/1）
SK03
H＝32.70m
1層　黒褐色土（10YR2/3）
2層　黒褐色土（10YR3/1）
SK04
H＝32.40m
H＝33.40m
1層　黒　色　土（10YR2/1）
2層　黒 褐 色 土（10YR3/2）
3層　黒　色　土（10YR2/1）
4層　黒 褐 色 土（10YR2/2）
5層　黒 褐 色 土（10YR3/1）
6層　灰黄褐色土（10YR5/2）
調査範囲外
H＝33.10m
1層　黒褐色土（10YR3/1）耕作土
2層　黒褐色土（10YR2/3）
3層　黒褐色土（10YR2/2）
4層　黒 色 土（10YR2/1）
5層　暗褐色土（10YR3/3）
6層　暗褐色土（10YR3/4）焼土少量混入
7層　褐 色 土（10YR4/4）
SK05
0
1m

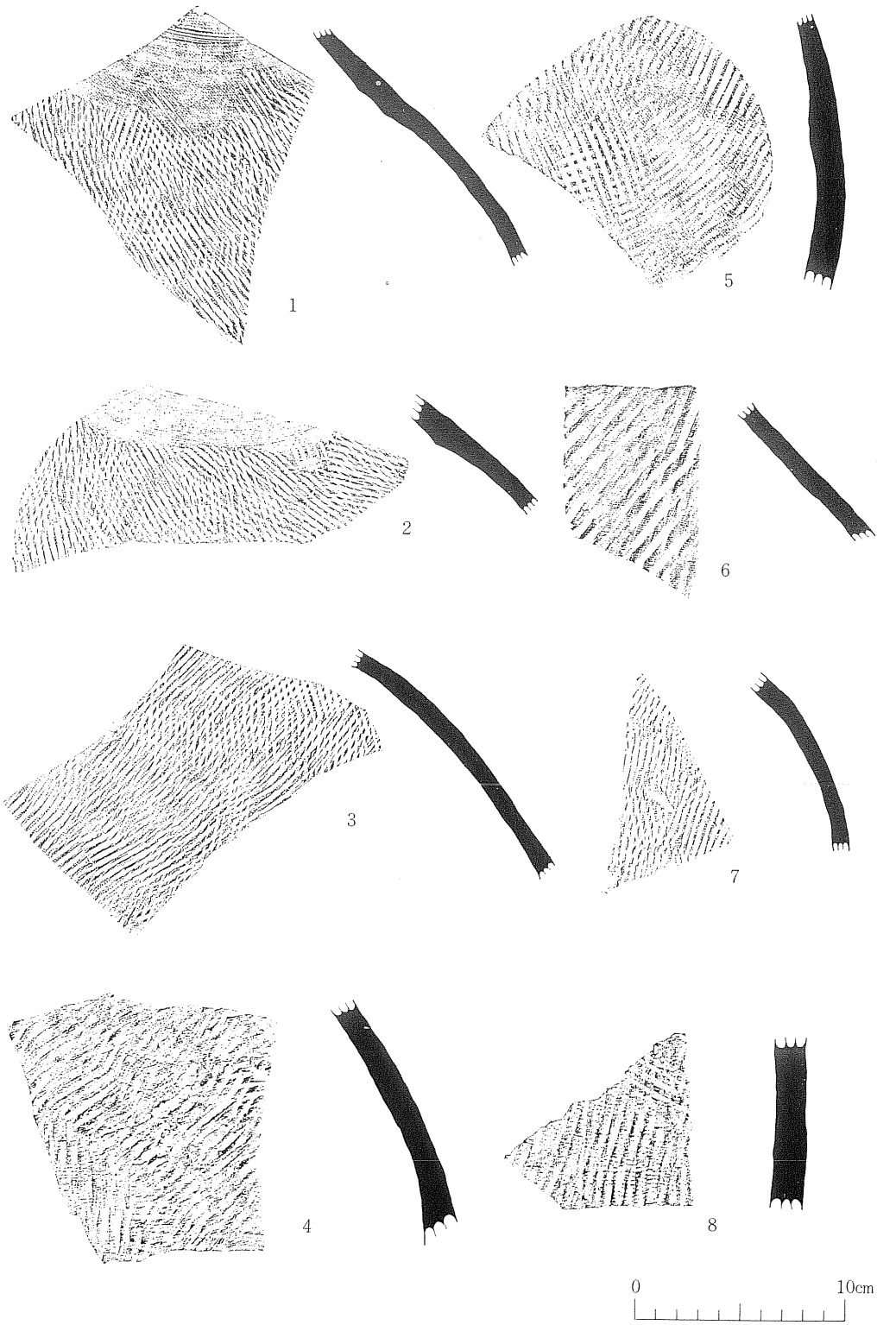
第７図　土　　壙



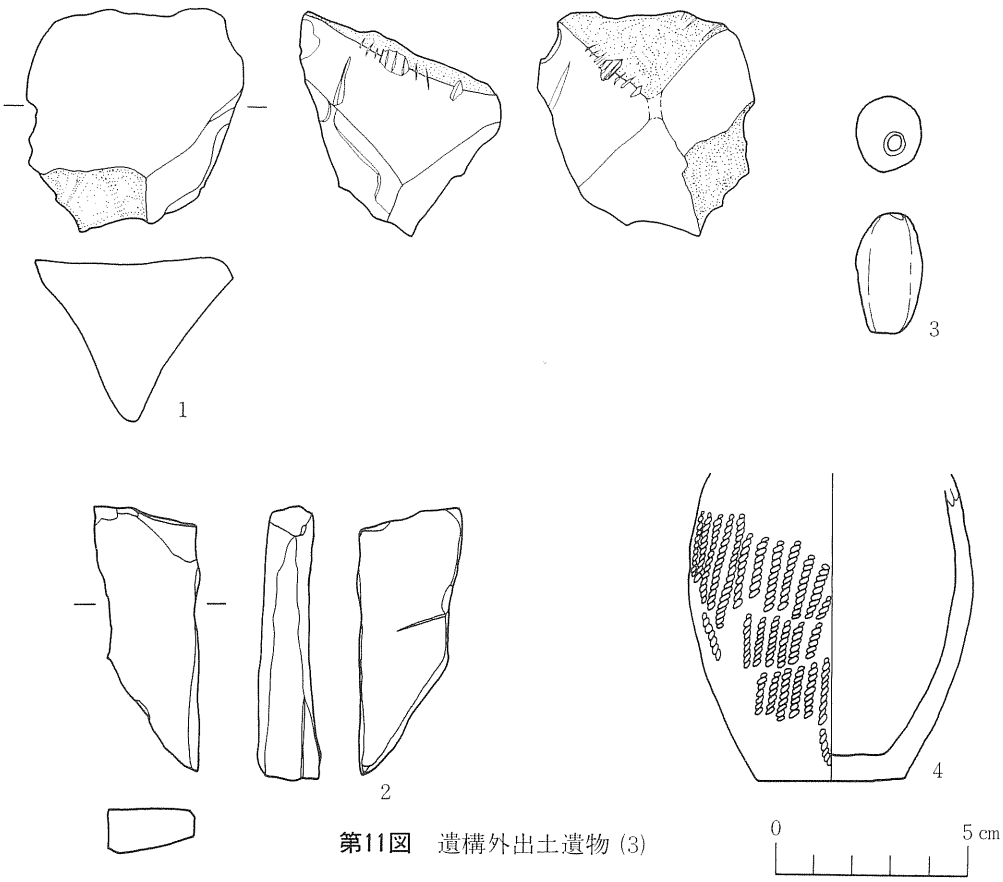
第８図　土壙出土遺物



第９図　遺構外出土遺物 (1)



第10図　遺構外出土遺物 (2)



第11図　遺構外出土遺物 (3)

第１表　土器観察表（１）

挿図番号	図版番号	出土遺構	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	胎土	色調	底部切り離し
第８図１	第７図版１	ＳＫ01	土師器坏	14.3	4.4	5.9	砂混入	内.橙 外.淡橙	回転糸切り(右)
〃　2	第７図版２	〃	〃	12.6	4.6	5.5	〃	内.橙 外.浅黄橙	回転糸切り
〃　3		〃	〃	—	5.2	—	〃	内.にぶい黄橙 外.橙	回転糸切り(右)
〃　4		〃	〃	—	5.0	—	〃	内.浅黄橙 外.〃	〃
〃　5		〃	〃	—	5.1	—	〃	内.灰白 外.浅黄橙	〃
〃　6		〃	須恵器長頸瓶	—	10.2	—	精選	内.灰黄 外.灰	不明
〃　7	第７図版３	ＳＫ02	土師器坏	12.2	5.0	4.9	砂混入	内.浅黄橙 外.〃	回転糸切り(右)
〃　8		〃	〃	13.0	5.4	4.9	〃	内.〃 外.にぶい橙	〃
〃　9		〃	〃	13.6	5.2	3.6	精選	内.浅黄橙 外.〃	不明
〃　10		〃	〃	〃	5.2	—	砂混入	内.〃 外.〃	〃
〃　11		〃	須恵器坏	〃	5.2	—	精選	内.灰黄 外.〃	回転糸切り(右)
〃　12		〃	須恵器甕	20.0	—	—	〃	内.黄灰 外.〃	—
〃　13		ＳＫ03	土師器坏	12.8	5.2	4.8	砂混入	内.浅黄橙 外.〃	回転糸切り(右)
〃　14		〃	須恵器坏	19.2	—	—	精選	内.灰 外.〃	—
〃　15		〃	須恵器甕	13.6	4.8	4.2	〃	内.灰黄 外.〃	回転糸切り(右)

第2表　土器観察表（2）

挿図番号	図版番号	出土地点	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	胎土	色調	底部切り離し
第9図1		21CⅡ層	土師器坏	13.2	6.0	4.6	精選	内.橙 外.〃	回転糸切り(右)
〃 2		20BⅡ層	〃	12.0	—	—	砂混入	内.浅黄橙 外.〃	—
〃 3		18D	〃	—	5.4	—	〃	内.〃 外.〃	回転糸切り(右)
〃 4		20CⅣ層上面	〃	—	5.0	—	〃	内.橙 外.〃	〃
〃 5		18DⅡ層	〃	—	7.0	—	精選	内.浅黄橙 外.〃	不明
〃 6	第7図版4	17DⅡ層	〃	—	5.4	—	砂混入	内.〃 外.〃	回転糸切り
〃 7		17CⅡ層	〃	—	5.2	—	精選	内.〃 外.〃	回転糸切り(右)
〃 8		18D	〃	—	5.4	—	砂混入	内.橙 外.にぶい橙	不明
〃 9		不詳	〃	—	5.4	—	〃	内.浅黄橙 外.黒褐色	〃
〃 10		18D	須恵器坏	—	6.0	—	精選	内.灰白 外.〃	回転糸切り
〃 11		19CⅡ層	〃	—	6.0	—	〃	内.灰黄 外.〃	回転糸切り(右)
〃 12		不詳	〃	13.6	—	—	〃	内.淡黄 外.〃	—
〃 13		〃	〃	14.4	6.0	4.3	〃	内.灰黄褐 外.にぶい黄橙	回転糸切り
〃 14		22BⅡ層	〃	12.4	4.4	3.9	〃	内.灰黄 外.〃	〃
〃 15		不詳	〃	—	6.0	—	〃	内.灰白 外.〃	回転糸切り(右)
〃 16		31CⅠ層	〃	15.6	—	—	〃	内.黄灰 外.〃	—
〃 17		17CⅡ層	〃	14.0	—	—	〃	内.灰黄 外.〃	—
〃 18		31CⅠ層	〃	13.4	5.0	4.5	〃	内.灰黄褐 外.灰黄	回転糸切り(右)
〃 19		21BⅡ層	須恵器長頸瓶	—	—	—	〃	内.灰 外.灰白	—
〃 20		19BⅡ層	土師器甕	17.0	—	—	砂混入	内.橙 外.〃	—
〃 21		18AⅡ層	須恵器壺	—	—	—	〃	内.灰 外.黄灰	—

第５章　ま　と　め

上雨堤遺跡にかかるバイパス建設予定地内1,640㎡を発掘調査し、平安時代の掘立柱建物跡２棟、柱列１基、土壙５基の遺構を検出した。出土遺物は平安時代の土師器・須恵器などで量的に極めて少ない。

ＳＢ01掘立柱建物跡の南北両側の桁行には、建物掘方に重複して外方に小規模な掘形が重複する。床束や庇部分には見られないことから身舎桁行の補強を目的としたものかと考えられる。

ＳＢ02掘立柱建物跡は建物方向、身舎柱間、掘形規模がＳＢ01掘立柱建物跡のそれらと近似しており、構築年代もほぼ同時期の遺構と見なせるであろう。

調査範囲内から竪穴住居跡は検出されなかったが、竪穴住居はこの時代の住居として一般的であり、遺跡は南に向って張り出す小さな舌状台地上に広がりが推定されるから、調査範囲外、殊に南西側の沖積地に向う緩斜面及び北側の平坦面にその存在が予想される。縄文土器は後期と考えられ、この時期の遺構も存在するものであろう。柱列、土壙に関しては性格は不明である。

出土した須恵器から、掘立柱建物跡などは９世紀後半から10世紀前半頃の遺構と考えられ、調査地点はこの時期の集落跡の一部と推定される。

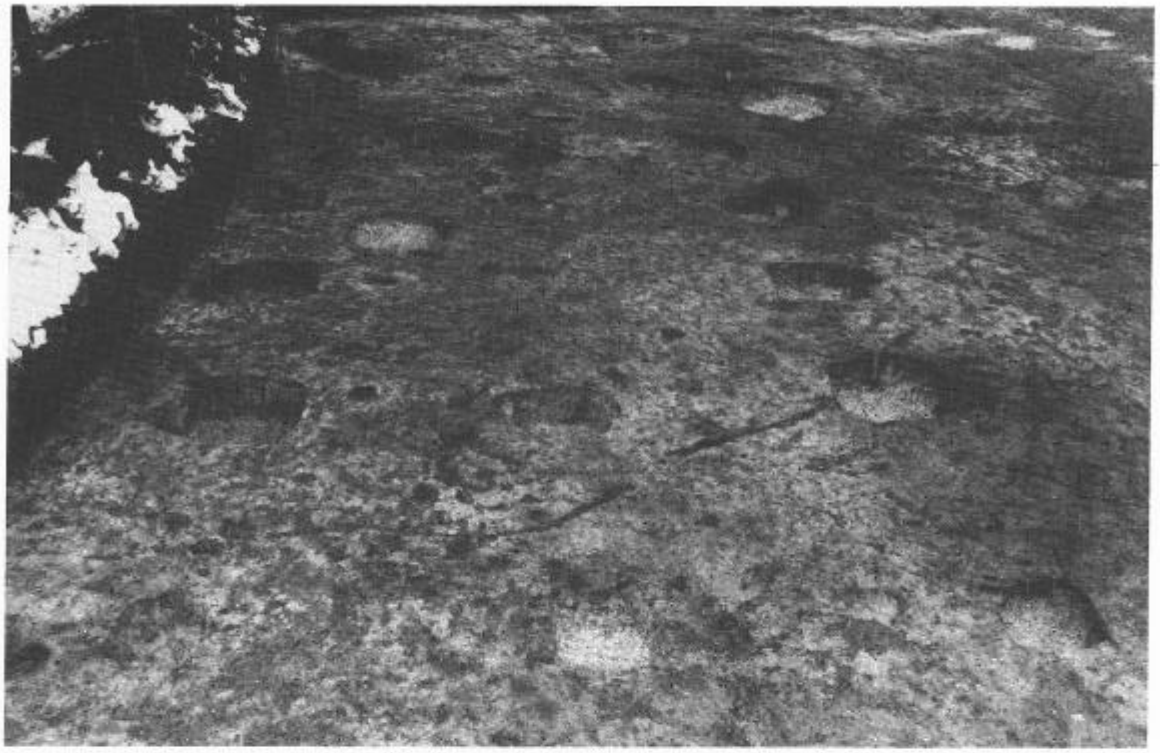
SB01掘立柱建物跡（北西より）

1．SK02土壙確認面

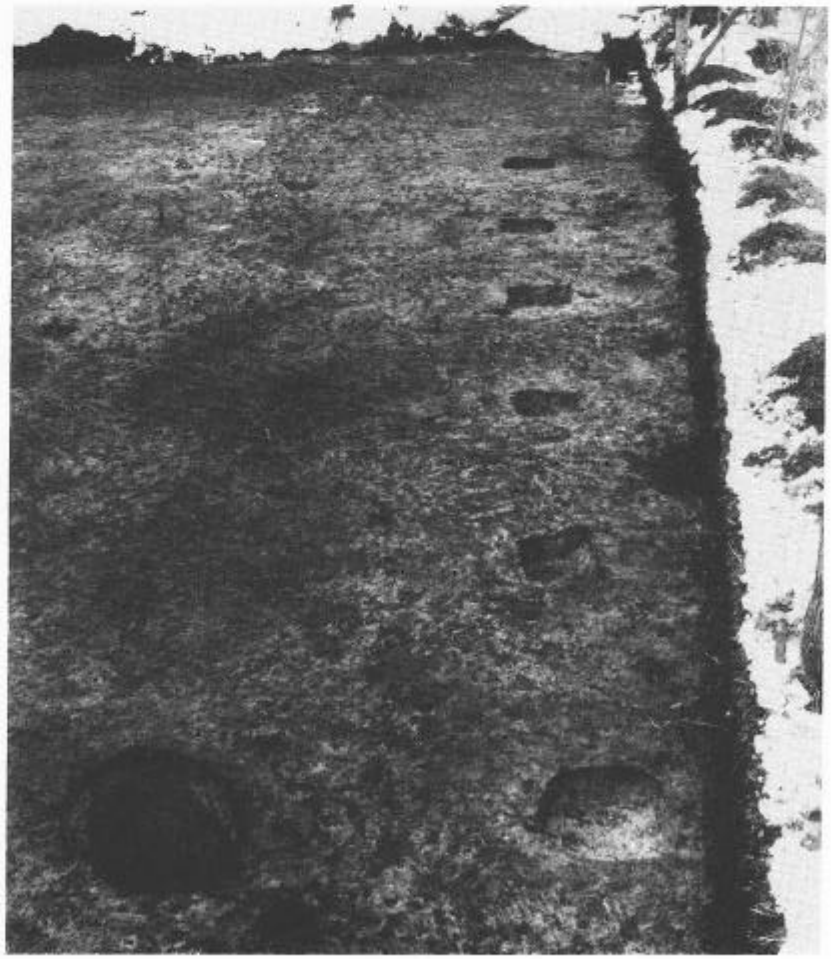
2．SK03土壙出土刀子

1．遺跡遠景

2．調査前の状況

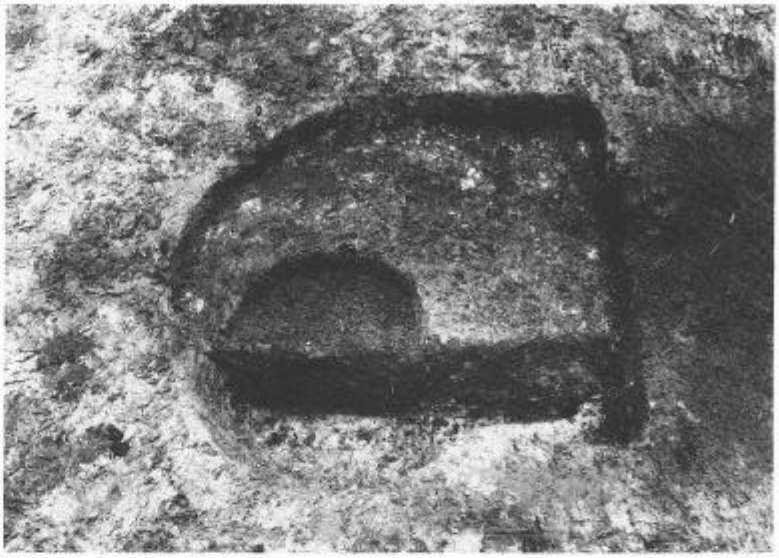


1．SB01掘立柱建物跡
（南東より）

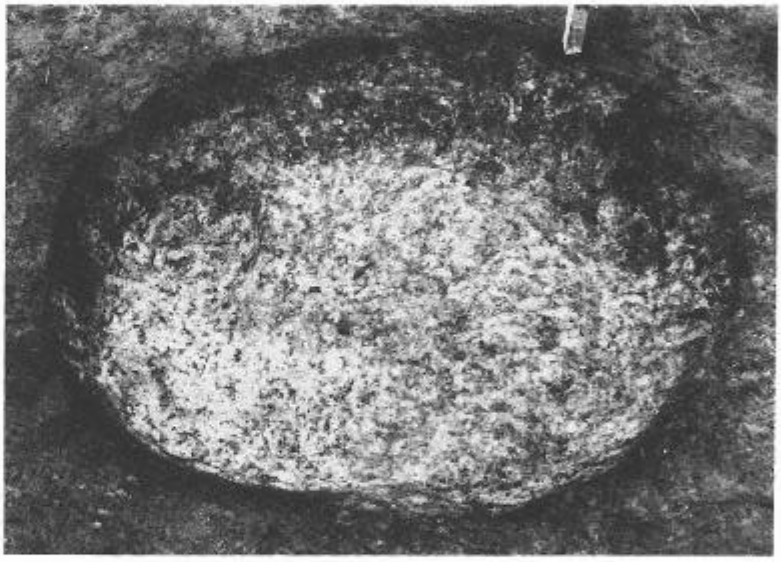


2．SB02掘立柱建物跡（北西より）

第五図版　遺　跡



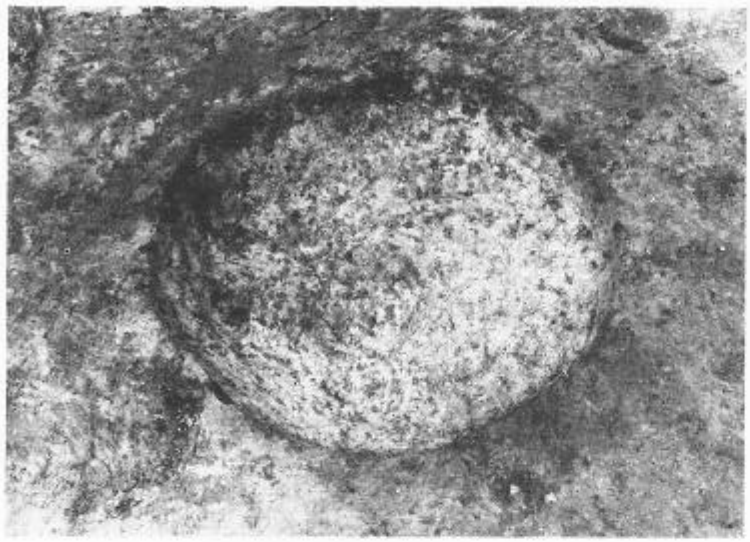
1．SB01掘立柱建物跡柱穴



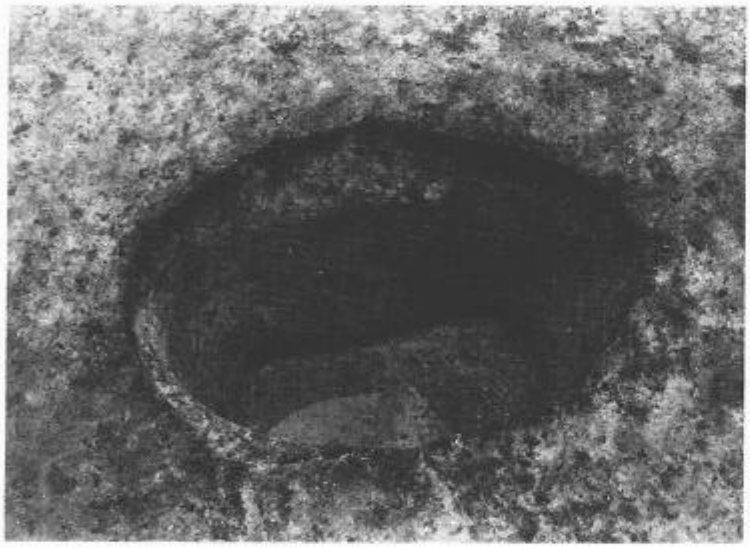
2．SK01土壙

3．SK02土壙

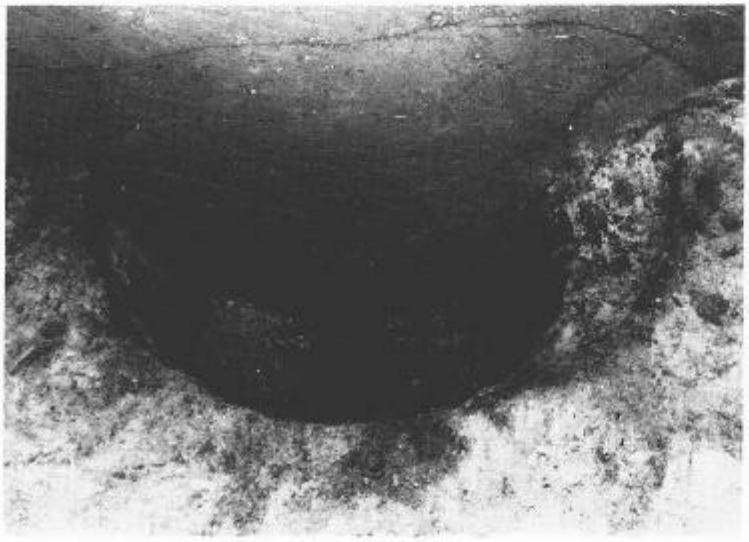
第六図版　遺　跡



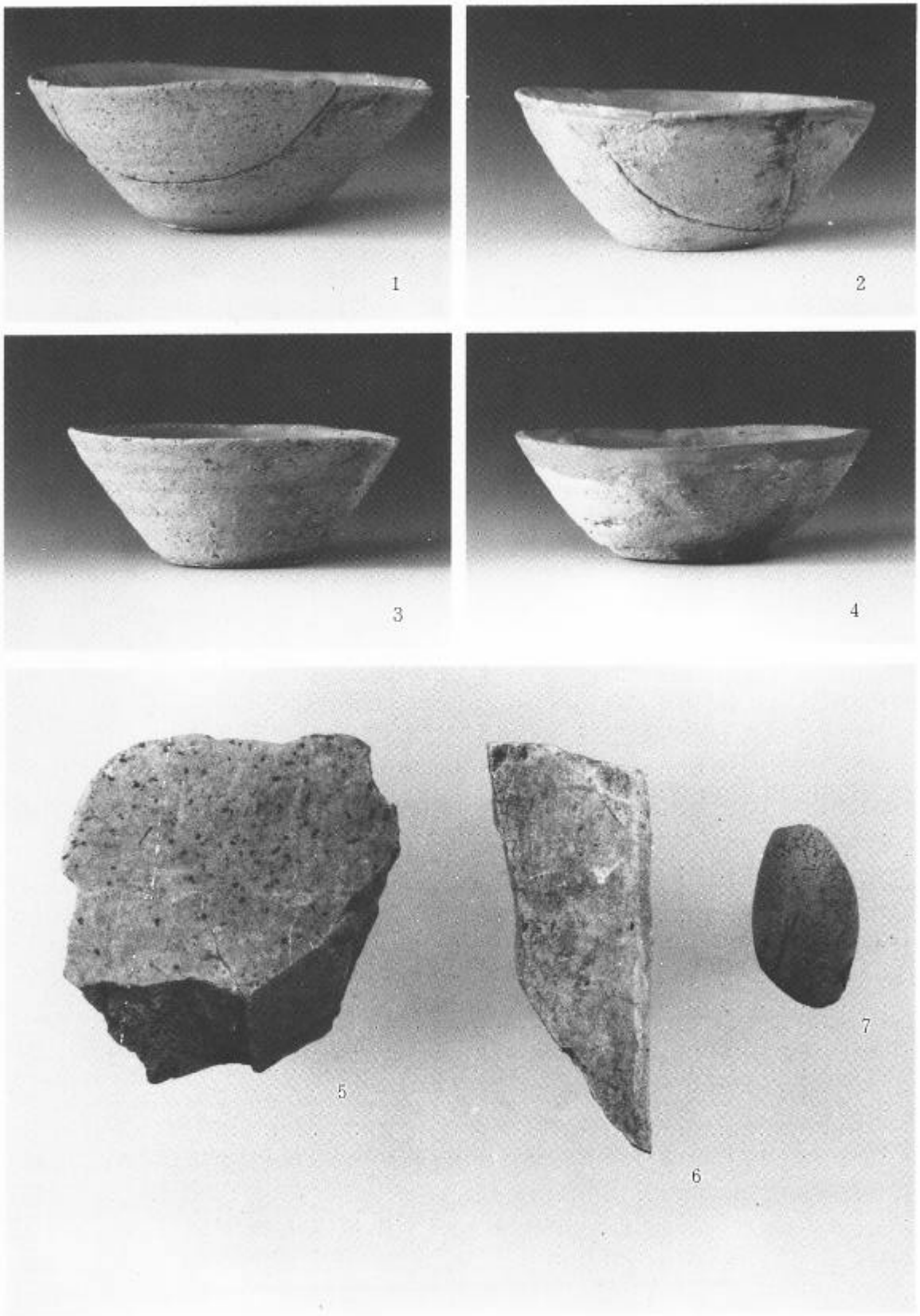
1．SK03土壙



2．SK04土壙



3．SK05土壙



1～4　土師器坏，　5・6　砥石，　7　管状土錘